

「東日本大震災」支援 ———— これまでの状況

ピープルズ・ホープ・ジャパン (PHJ) は3月11日に発生した「東日本大震災」直後から被災地で医療支援活動を行っている全日本病院協会 (全日病) を通じて被災地の皆様を支援することを決め、3月15日に募金活動を開始しました。同時にこの募金は全日病の医療救護班派遣に使う方向付けをし、PHJのスタッフが全日病の事務局に席を置き、密接に連携する体制を整えました。

多くの個人、企業、病院、他の団体から寄付金を頂きました。6月4日に開催された全日病定期総会で、PHJ 甲谷理事長から全日病西澤会長へ第一回として支援金 (1,500万円) とIT 機器・衣料品等の目録が贈呈されました。支援金は3月から6月末まで被災地で活動する医療救護班の派遣費用や被災された全日病会員病院の復興支援に充てられます。

PHJ への支援は募金だけでなく次のページで紹介したいろいろな形で頂きました。また下記の温いメッセージも頂きました。「被災者の方々のためにお役

にたてて下さい」「OB会の解散にあたり、積立金を災害募金に寄付いたします」「アメリカ赴任中です。日本の復興をUSから応援しています」「阪神大震災で震度7の激震地で生かされました。先は長い道のりですが、負けないで！日本を信じて前向きに頑張ってください。必ず明日はきます！！」

(次ページに続く)



全日病定期総会で PHJ から寄付目録贈呈

巻頭言 / 東日本大震災



PHJ理事
西澤 寛俊

全日本病院協会会長
西岡病院理事長

今回の東日本大震災で亡くなられた皆様のご冥福と被災された皆様の一日も早い健康回復を心より祈願いたします。

全日本病院協会 (全日病) は震災発生後直ちに災害対策本部を立ち上げ、被災地に医療救護班を派遣しました。日本医療法人協会と共同で派遣された医療救護班 (医師、看護師、事務方等で編成し、1チーム4~5名) は合計115班、485人 (6月10日現在) に至っています。同時に2300の会員病院に義援金募集を呼びかけており、この活動はピープルズ・ホープ・ジャパン (PHJ) も連携して行いました。

私が理事をしております PHJ は医療支援分野の認定NPO法人で、集めた義援金は全日病を通じて医療救護班の派遣費用や被災地復興のための医療支援に使われております。またPHJからは被災地病院等にパソコン300台、プリンタ100台の寄贈提供を受けて被災地復興に大きく寄与しました。しかし、3月11日の東日本大震災から3ヶ月半を過ぎようとしておりますが被災地の復旧・復興は長い道のりになります。

全日病は私を含めて3代の会長がPHJ理事として活動を応援しております。全国の全日病会員の中にもPHJの医療支援活動に賛同して応援している病院もあります。

PHJの支援活動は主にカンボジア、インドネシア、タイ等の東南アジアですが、今回の大震災では国内支援にも活動範囲を広げました。これを契機に全日病とPHJとの連携が深まり、共に発展することを期待しております。

「東日本大震災」支援 ———— これまでの状況 (つづき)

企業・団体からの支援

▶ ノートパソコン、プリンター、電子カルテを診療施設へ寄贈

PHJ は日本ヒューレット・パカード株式会社様からタブレット PC を含むノートパソコン 300 台と多機能プリンター 100 台を寄付していただき全日本病院協会を通して被災地の診療施設へ寄贈いたしました。合



HP 社員がソフトをインストール



被災地での電子カルテ導入

わせて NTT グループ様から寄付していただいた電子カルテについても 5 月初め日本 HP、NTT-ME、PHJ のスタッフがこれら IT 機器の一部搬入、据え付けと運用サポートを現地で行いました。また 5 月 28 日と 6 月 18 日、日本 HP の社員合計 30 名がボランティアでソフトの PC へのインストールを行って下さいました。

▶ サッカー日本代表チームのオフィシャルスーツとアクセサリー購入代金の 10% と同額のマッチング寄付

メンズラグジュアリーブランドのダンヒル様より、被災地を支援するため PHJ の東日本大震災募金に寄付したいとお申し出をうけました。同社が販売するサッカー日本代表のオフィシャルスーツ (限定 150 着) とアクセサリー商品のご購入合計額から 10% とメーカーからマッチング方式でさらに同額を寄付していただきます。

タイ、カンボジア、インドネシアからの応援

タイ PHJ タイ事務所は東日本大震災のニュースを知った HOPE パートナー制度で支援をうけている子供達の家族、提携している病院、大学、ヘルスボランティアなどの方々からお見舞いのカードやご寄付を受け取り東京事務所スタッフに渡してくれました。被災地の方に使っていただきたいとの優しい心遣いで編んでくださったマフラーや帽子とともに、5 月初めに気仙沼の社会福祉センターにお届けしました。また「You are not alone」[がんばれ日本]などをタイ語、英語、日本語で表示した T シャツとポロシャツを作



T シャツプロジェクトのメンバー

り、寄付を募りました。3 月から 6 月 20 日までに合計 38 万円を寄付して下さいました。タイの皆様優しい温かい心に感謝でいっぱいです。

カンボジア PHJ カンボジア事務所でもスタッフが被災地支援 T シャツを購入し、日本の支援を受けて建てられた小学校の校長が自発的に募金活動をして下さいました。校長 スオン・ニョ先生と学校委員代表ハウル・パラさんからの手紙には「ルッセイ・ドイ小学校の学校委員、教員、学生と近隣の村人は、今回の災害で 1 万

人以上の方々がお亡くなりになったことを聞き、とても悲しく思っています。また被災された方々が安定した生活を取り戻せるよう祈っています。額は少ないのですが、村人や学生たちは、被災した日本人を心配して気にかけています」と書かれていました。



寄付金と手紙を披露する校長先生

インドネシア 地震、津波を度々経験しているインドネシアでも、多くの人々が東日本大震災で被災した方々について心配して下さいました。PHJ インドネシア事務所のためにレストラン 14 か所で募金箱を置いて募金をして下さいました。5 月 18 日に帰国した伊藤所長が日本円に換算して 30 万円を届けてくれました。インドネシアの人々の温かい思いやりが被災地に届くよう PHJ も支援活動を続けます。

どの国も毎日の生活が苦しい人たちがほとんどですが、これまで日本に支援をしてもらったから恩返しをしたい、という思いから始まったとのこと。途上国だとか、先進国だとか、そうしたことを抜きにして、一人の人間として助けたいという気持ちがストレートに伝わる海外からの支援に心を動かされました。

PHJ は「指定寄付金」認定団体に指定されました

4 月 27 日に成立した震災特別税制には認定 NPO 法人向け「指定寄付金」制度が盛り込まれています。この制度は認定 NPO 法人が、東日本大震災の被災者に対する救援や生活再建の支援を行う活動に充てるために募集する寄付金について、一定の要件を満たしている場合に適用されます。PHJ は 5 月 9 日付東京国税局長より「指定寄付金」認定団体第 1 号に指定されました。

この結果、5 月 10 日以降に PHJ に入金される寄付金は下記の税制優遇の対象になります。

個人寄付の場合：税額控除 寄付金の 50% *

* (寄付金 - 2000 円) × (国税 40% + 地方税 10%)
(地方税は寄付者の住所の条例によります。)

法人寄付の場合：全額損金算入 (無条件)

カンボジア—事業成果を共有するセミナーを開催しました

2008年に開始した「コンポントム州母子保健改善事業」は、2010年末をもって一旦終了しました。事業の成果を調べるために、カンボジア事務所は地域でのサーベイを行いました。調査の結果、事業開始前と比べると妊産婦の行動が大きく変わり、大勢の女性たちが保健センターのサービスを使うようになったことが分かりました。また、保健ボランティアや伝統的産婆といった村で保健を担う人たちにもグループ・インタビューを行いました。

これらの成果を事業の関係者と共有するため、5月にコンポントムで一番大きいホテルでセミナーを開催しました。州保健局と保健行政区の母子保健担当者、保健センタースタッフといった政府関係者ばかりでなく、村の保健ボランティアたちも招待しま



セミナーの様子

した。事業地はコンポントム州都から50kmと遠いため、何人くらいの参加があるのか不安もありましたが、当日は100名以上の参加があり、会場は人でい

っぱいになりました。また、資金面での支援をいただいている在カンボジア日本大使館のスタッフもセミナーに参加しました。

セミナーでは、事業の成果報告と、次期事業の説明を行いました。参加者は、伝統的産婆から助産師へ分娩介助の件数が顕著に移行するなどの大きな成果に喜び、次の3年もPHJと一緒に村のお母さんと子供たちのために保健の活動を行うことを誓いました。州保健局副局長からは、村の健康を支えているのは、保健センターや病院で働く保健スタッフだけでなく、保健ボランティアや伝統的産婆の役割が重要であることや、PHJの支援によって村と保健センターが協力し効果的に村の保健を向上させたことへの賛辞をいただきました。

私は、この事業での成果は、PHJスタッフのみならずコンポントム州の関係者の協力と日本から支えてくださっている支援者の皆様のおかげだと思っております。次の3年も、この成果が定着し、さらに日常生活で健康を守ることができるような保健知識や実践の普及を図っていきたく考えています。

(カンボジア事務所所長 中田)

五月女理事



Vol.3 素晴らしきかな、夜明けの日本

幕末から明治にかけて、多くの外国の人々が日本の夜明けに輝きを与えてくれましたが、その中の一人がご存じ米国のペリー提督です。彼は1853年の来日前、日本を極東の小さな島国で大した文化も技能もない国だと思っていたそうです。しかし、1854年9月28日付のニューヨーク・タイムズ紙に掲載されたペリー提督滞日報告記はこのように日本を紹介しています。「…日本人は親切で礼儀正しく、外国人の我々に敬意を払ってくれる。日



幕末の江戸城 横浜開港資料館

本人の教育水準は非常に高くまた勤勉で、精密な技術力を持ち合わせている。日本はそう遠くない日に、世界で最も進んだ工業大国になるであろう。…」今から160年前の予言でした。

さて、今度は英国のアーネスト・サトウの話です。1862年、彼は駐日英国公使館の通訳として来日、以降20年間に亘り日英友好と日本文化の欧州への紹介に貢献してくれたのでした。後にシャム(タイ)公使、モロッコ公使を経て、1895年(明治28年)

ついに念願の駐日公使(現在の駐日特命全権大使)として日本に戻ってきたのでした(同年ナイトの爵位を叙されました)。彼は単に外交官としてだけではなく、日本研究者としても学者としても超一流でした。彼の回想録(一外交官の見た明治維新)の中で、「かつて、喜望峰(南アフリカ・ケープタウン)の東側にこんなに素晴らしい文化を持った民族がいるとは想像もできなかった。」と述べています。彼は1929年、86歳で亡くなるまで日本を愛し日欧交流に尽くしてくれたのでした。

今、開発途上国の発展のために、日本の各界の人々が汗を流して頑張っています。筆者もこれまで多くのアジア・アフリカの国々を回り、NGOの人々や青年海外協力隊などが現地の人々と一緒になって国造りに務めている姿を見てきましたが、そこに夜明けの日本の国造りに貢献してくれた外国の人々の姿が重なってくるのです。



五月女光弘(さおとめみつひろ) 外務省初代NGO担当大使、元特命全権大使、文藝春秋ベストエッセイストの一人、PHJ理事他。

会員のひろば

「収集した記念切手の行方！！」

伊藤 晴朗（個人会員）

昨秋、吉祥寺をぶらついていて、たまたま通りかかった金券ショップに顔を突っ込みました。学校を出て就職したばかりの時に職場の先輩に親切に誘われて、当時盛んだった記念切手の収集を始めました。それから、50年も経ち、結構な枚数になっていましたので、遅ればせながら、切手市場の現状を知りたかったからです。

その店主曰く、切手収集趣味の消滅で市場は全く元気なし。従って、購入に関しては二東三文、一番良い方法は、せつせと手紙を書くことのご託宣。随分とがっかりさせられました、どうにもならないなと思ひ込んでいました。

そうこうする内に、3.11 東日本大震災です。PHJも募金を開始されました。わずかですが、募金もさせていただきましたが、同時に、この機会にこれらの切手の有効活用は出来ないだろうかと考えました。金券ショップでの換金は最も不利であり、

今の最善方法は郵便局で流通量の多い額面の切手に交換してもらうことだと判ってきました。そして、PHJで募金と同じように有効に利用してもらうのは…？



PHJへ届けていただいた80円切手

多分、PHJや現地の病院では、80円の郵便切手を多数使うのではと予想し、PHJに問合せたところ、切手の寄贈を受け付けてくださるとの朗報。早速、パソコンで切手の保持状況を整理してみたところ、切手の枚数で6,000枚強ありました。行きつけの近所の郵便局に相談、すべてを80円切手への交換を頼みました。かなりの枚数の80円切手に交換してもらうことが出来ました。

交換した80円切手をPHJさんにお届けすると同時に、日頃のPHJメンバーのご苦勞に感謝を述べさせていただきました。また、収集切手を多数お持ちの方への参考情報としてお役立ていただけると幸いです。

「2011年タイ・カンボジア横断スタディツアー」を終えて

2009年よりスタートした東南アジアの医療環境をめぐるPHJのスタディツアーは今年も2月20日から8日間の日程で実施しました。一般公募で集まった7名の参加者（研修医、助産師、看護師、学生など）とともに、PHJスタッフの石関と南部がPHJの支援地域であるタイとカンボジアを訪問してきました。最初の訪問先タイではHIV/AIDS予防教育に参加者の多くが関心を寄せました。同世代が教えあうピア教育という方式でPHJは大学、高校などでHIV/AIDS予防教育活動を広めています。一方カンボジアでは現地の人々の暮らしや保健・衛生環境をより深く知るため、村を歩き、そこに住む人に健康に関するインタビューをしました。PHJのスタッフとしては支援している村の人たちの健康への意識の高まりを直に知ることができたことも、大きな収穫でした。タイとカンボジアに共通していたことは、

ヘルスポランティアや伝統的産婆さんなどが村の世話役として存在し、地域の人のつながりが強固なこと。途上国といわれる国にも学ぶことがあるのでは、と感じました。



カンボジアの村でインタビューする参加者

（東京事務所 南部）

2011スタディツアー訪問/見学先（2月20日～2月27日）

- タイ：PHJタイ事務所、公立病院で親子に向けた保健教育、お寺での社会貢献事業、専門学校でのエイズ予防教育見学、子宮頸がん/乳がん予防教育など
- カンボジア：PHJカンボジア事務所、トゥール・スレン虐殺博物館、国立母子保健センター、村歩きとインタビュー、バライ・サントック保健行政事務所、保健センター、アンコールワットなど

第43回運営委員会—各国の活動と東日本大震災支援状況を報告

5月19日（木） 5:00～7:30pm 日本GE株式会社様の会議室をお借りしてPHJの運営委員会を開催しました。タイ、インドネシア、カンボジアの所長から活動報告の後、東日本大震災支援状況について、全日本病院協会の浦川事務局長は、医療救護班の派遣報告、6月以降の復興に関する計画を述べ、PHJからの支援に謝意を述べられました。木村代表からは1、2ページに掲載されている支援状況の報告がありました。

